「平家物語」　─中世の軍記物語

17年度　近畿大学

★　次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

　三月十六日、ⓐ※少将※へかうぞ着きたまふ。大納言の、すはま殿とて鳥羽にあり。①住みあらして年へにければ、※はあれどもほひもなく、門はあれども扉もなし。庭に立ち入り見たまへば、たえてふかし。池のを見まはせば、の山の春風に、白波しきりにおりかけて、※す。②ぜし人の恋しさに、尽きせぬ物は涙なり。家はあれどもんもん破れて、※やり戸もたえてなし。「ここにはⓑ大納言殿の、とこそおはせしか。この※をばかうこそ出で入りたまひしか。あの木をば、みづからこそ植ゑたまひしか」なンどいひて、ことの葉につけて、ⓒ父の事を③恋しげにこそのたまひけれ。

　弥生なかの六日なれば、花はいまだ名残あり。※の梢こそ、折知りがほに色々なれ。④ⓓ昔の主はなけれども、春を忘れぬ花なれや。少将花のもとに立ち寄ッて、

　　【Ａ】李もの言はず、春いくばくか暮れぬる。跡なし、昔誰かんじ。

　　【Ｂ】ふるさとの花の物いふ世なりせばいかにむかしのことを問はまし

　⑤この古き詩歌を口ずさみたまへば、※入道も、折節あはれに覚えて、の袖をぞぬらしける。暮るる程とは待たれけれども、⑥あまりに名残惜しくて、夜ふくるまでこそおはしけれ。

※少将……丹波少将藤原を指す。成経は流罪となっていたが、恩赦されて帰京する途中だった

※鳥羽……現在の京都市南部の地。白河天皇が造営した鳥羽離宮があった

※故大納言の山庄……大納言藤原の山荘。鳥羽離宮の近くにあった

※築地……土を塗り固め、屋根をつけた垣

※おほひ……ここでは、築地の屋根

※秋の山……鳥羽離宮にあった築山の名称

※紫鴛白鷗……おしどり（羽が紫色）と白いかもめ

※らんもん……（板垣などの上部の飾り）のこと

※蔀やり戸……格子組の裏に板を張った引き戸

※妻戸……部屋のすみにある両開きの戸

※楊梅桃李……柳、梅、桃、すもも

※桃李もの言はず、春いくばくか暮れぬる。煙霞跡なし、昔誰か栖んじ。……原文の漢詩を書き下し文にした。「栖（住）んじ」は「住みし」の音便形

※康頼入道……平康頼のこと。康頼は「少将」藤原成経とともに流罪となったが、恩赦されて成経とともに帰京した

問１　傍線部①の意味として、最も適切なものを次の中から選べ。

１　生前の大納言があまりにも長い間ここで暮らしていたので

２　家財を粗雑に扱う大納言が年老いるまで過ごした所なので

３　長年住んでいた大納言がいなくなってから年月が経ったので

４　故大納言が年老いて死ぬまでの月日をここで過ごしたので

問２　傍線部②「興ぜし人」と異なる人物は、波線部ⓐ～ⓓのうちの誰か。次の中から一人選べ。

１　ⓐ少将　　２　ⓑ大納言殿　　３　ⓒ父　　４　ⓓ昔の主

問３　傍線部③の理由として、最も適切なものを次の中から選べ。

１　屋敷のあちこちを見るたびに、父と過ごした日々を思い出すから

２　大納言殿のことを知るにつけ、自分の父が恋しくなってきたから

３　自分が植えた木を見つけて、父と暮らした頃が懐かしくなったから

４　せめて言葉の上だけでも、乱暴な父への共感を示そうと思ったから

問４　傍線部④は、平安時代の漢学者・漢詩人、菅原道真の以下の歌をもとにしている。この歌の説明として最も適切なものを次の中から選べ。

　　　　　流されはべりける時、家の梅の花を見はべりて

　　吹かばひおこせよ梅の花あるじなしとて春を忘るな

１　主人である自分がいなくなったとたん咲かなくなった梅の花に怒りを感じている

２　主人である自分がいなくなっても春には咲いてくれよと梅の花に別れを告げている

３　主人である自分がいないので梅の花が咲かなくなるのはもっともだと納得している

４　主人である自分がいなくなったら梅の花が春を忘れるだろうと恐れおののいている

問５　【Ａ】の詩に表されていないものを次の中から一つ選べ。

１　もの言わぬ桃李の花　　２　晩春の夕暮れ

３　痕跡を残さない霞　　　４　住人を失った家

問６　【Ｂ】の歌の現代語訳として、最も適切なものを次の中から選べ。

１　故郷の花がことばを話す世の中になるのなら、いくらでも昔のことを尋ねてやろう

２　故郷の花がことばを話す世の中だったとしても、決して昔のことは尋ねないだろう

３　故郷の花がことばを話す世の中になったら、どのように昔のことを尋ねてみようか

４　故郷の花がことばを話す世の中だったなら、どんなにか昔のことを尋ねるだろうに

問７　傍線部⑤の理由として、最も適切なものを次の中から選べ。

１　主を失い屋敷が荒れ果てていく中、花は春を忘れずけなげに咲いていたことに、深く心を動かされたから

２　廃墟となった屋敷の庭で咲き乱れる花々の異様なまでの美しさに、思わず気圧されてしまったから

３　かつて誰が屋敷に住んでいたか知りたいのに手がかりがつかめず、もどかしさが募るばかりだから

４　主がいないのに平然と咲いている花を見て、植物が相手とはいえ文句の一つも言いたい気分になったから

問８　傍線部⑥はどのようなことか。最も適切なものを次の中から選べ。

１　康頼入道とここで別れるのが辛く、出発の時刻を遅らせたということ

２　荒れてもなお美しい屋敷に見とれて、つい長居してしまったということ

３　亡父ゆかりの場所を離れがたく、結局夜更けまでいたということ

４　古い詩歌をしみじみと味わっている間に、夜になってしまったということ

【解答】

問１　３

問２　１

問３　１

問４　２

問５　２

問６　４

問７　１

問８　３

【現代語訳】

　同年三月十六日、（帰京する）少将（成経）は鳥羽へ明るいうちにお着きになる。（少将の父）故大納言の山荘、すはま殿と呼ばれる御殿が鳥羽にある。長年住んで（いた大納言がいなくなってから）年月が経ったので、築地はあるが屋根もなく、門はあるが扉もない。庭に立ち入って御覧になると、人の通った跡がなく苔が深い。池のほとりを見渡すと、秋の山から吹きおろす春風のために、白波がしきりに寄せ返して、紫のおしどりや白いかもめがあちこち歩き回っている。（これらを）興じた人（＝故大納言、成親）が恋しく思われて、涙が止めどなく流れるのだった。家はあるが羅文が破れ、蔀やり戸もまったくない。「ここには大納言殿が、こんなふうにいらっしゃった。この妻戸をこんなふうに出入りなさった。あの木を、ご自分でお植えになったのだ」などと言って、ひと言一言、父のことを恋しそうにおっしゃったということだ。

　三月十六日であるから、桜の花はまだ少し残っている。柳、梅、桃、すももの梢が、今は自分たちの季節だというように色とりどりである。昔の（屋敷の）主人はいないけれども、春を忘れない花であるよ。少将は花の下に立ち寄って、  
　桃李は口をきかないから、（人が去って）春が何度過ぎたのかを語らない。霞は跡をとどめないから、昔誰が住んでいたのかもわからない。　　  
　故郷の花がことばを話す世の中だったなら、どんなにか昔のことを尋ねるだろうに。

　（成経が）この古い詩や歌を口ずさまれると、康頼入道も、折が折であるからしみじみと思われて、法衣の袖を涙でぬらした。（少将は）日が暮れるまではとお待ちになったが、あまりに名残が惜しくて、夜が更けるまでいらっしゃった。